

2023年12月24日

大いなる喜びの時

マタイ2：1～12

・クリスマスを迎えて

クリスマスを迎えて、町は明るく華やかな雰囲気になっています。コロナのことがありましたので、ここ数年のクリスマスは抑え目だったように思いますが、今年はコロナ以前のお祭りのようなクリスマスが戻って来たように思います。しかし、このような姿が本当のクリスマスだろうか、私たち教会に関わりを持っている者は当然考えます。敢えて言えば、こういうお祝いに仕方よいのだろうかとも思うわけです。そして、教会に関わりのある私たちが感じるというだけではなく、教会と直接関わりのない人たちでもそのように感じていることを思わされる機会がありました。10年ほど前だったと思いますが、クリスマスの時期の高知新聞のコラム欄で、ある記者が、日本中で行われている商業ベースで進められているクリスマスの姿に強い疑問を持っていると書いていました。そして、クリスマスの時期に高校生がある福祉施設に訪問した時のことに触れ、こういう静かな時、他者のために何かをする時こそが本当のクリスマスではないかと思っているという言葉で結ばれていました。その記者としてのクリスマスの再発見があったということだと思います。

この言葉を読んでいて、私自身深く考えさせられました。コロナを経て復活したような、お祭りのようなクリスマスを見て、本当にそれでよいのかという強い問いかけは、教会に直接関わりのない人たちの中にもあるということです。そして、本来のクリスマスは、そんなお祭りのような時ではなく、他の人のために何かをしていく、そういう時ではないかという言葉。それは確かにその通りだと思いますし、大変心に残りました。しかし、同時にもう一つの思いも私の心に浮かびました。それは、大騒ぎでない静かなクリスマス、他の人のために何かをするクリスマス、それもまた、クリスマスを過ごす一つの姿なのです。ある人は、クリスマスを思いっきり楽しく過ごしたいと思うでしょう。またある人は、この記者の方と同じように、心静かに過ごしたいと思うでしょう。それぞれの思いがあります。

しかし、クリスマスを本当の意味で祝おうとするならば、どうしたらクリスマスらしくなるのかと考える以上に、クリスマスの出来事そのものに出会わなければならないと思わされたのです。あのクリスマスに一休何が起こったのか、その時起こったことが今の自分にとってどのような意味を持っているか、そこで一体何が与えられたのか、そのようなことを本当の意味で知っていく時に、本当の意味でのクリスマスの喜

びが与えられることを思いますし、クリスマスをお祝いすることができると思います。今日、一緒にクリスマスとは何か、クリスマスに与えられた喜びとは何か、クリスマスを良く知っている方も、少しは知っているという方も、いや聖書のクリスマスに初めて触れているという方も、共に、もう一度一から確認させていただくような思いで、聖書の言葉と一緒に聞いていきたいと思います。

・学者たちの姿

イエス様がお生まれになった時、そのイエス様の許を訪ね、誕生を祝った人たちがいました。まずは、貧しい羊飼いたちがいました。そして、ここに出てきます「占星術の学者たち」です。「東の方からエルサレムに来て」とあります。彼らは、東の方からイエス様のお生まれになったユダヤの国にわざわざやって来たのです。この「東の方」とは、当時のペルシャ、今のイランのあたりを指していると言われます。そして、彼らは「占星術の学者」でした。占星術と聞きますと、星占いのようなものを想像されるかもしれませんが、ここでの占星術とは、今の星占いとはだいぶ違います。当時の中近東の世界では、星の運行や天体の現象の中に、神々の意思が表されていると考えられていました。ですから、「占星術」とは、星や天体の変化に示されている神々の意思を読み取っていく、そういう大切な役割を担っている人たちでした。そして、彼らは、星を観察することを通して示されたことを、王や政治を司る者に進言をしていました。ですから、彼らは国の将来を考える、そういう重要な役割を担っている存在でした。

その彼らが、どうして、何百キロの長い道のりをはるばる旅して、イエス様がお生まれになったユダヤまでやって来たのでしょうか。実は、彼らが常に観察していた夜空に、特別な星が輝いたからでした。学者たちはエルサレムで尋ねます。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」、彼らが見たのは、「ユダヤ人の王」が生まれたことを知らせている星だったのです。それで、彼らは、星の告げることを確かめてみたいと思ったのです。そのために、学者たちははるばる長い旅を経て、ユダヤの国までやって来たのです。

学者たちの言葉を人つてに聞いたユダヤの王であるヘロデは、大変不安に感じたのです。新しい王が誕生したということは、自分の地位が危うくなることを意味していました。ですから、何とかしなければならなかったのです。そして、聖書の預言を通して、新しい王が「ベツレヘム」で生まれることになっていると確認します。学者たちを密かに呼び寄せて、こう言います。「行って、その子のことを詳しく調べ、

見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう』と言ってベツレヘムへ送り出した。」と。勿論、ヘロデの本心は、拝みに行こうというものではありませんでした。生まれた子どもを早い段階で抹殺してしまおうという思いでした。そのようなヘロデの歪んだ思いに導かれてでしたが、学者たちはベツレヘムへと行くこととなりました。学者たちは、新しい王がベツレヘムで生まれたことまでは分かりました。しかし、その先、手掛かりはありませんでした。ところが、かつて東方で見た星が先立って進み、幼子がいる場所まで導いたのです。そうして、学者たちは誕生した新しい王、主イエスとお会いすることができたのです。このような経過で、学者たちは、羊飼いたちと共に、お生まれになったイエス様の許を最初に訪れる人たちとなったのです。

・神様の招きの中で

彼らのはるばる旅をしてきたのは、ユダヤに新しい王が誕生したことを知らせる星を見たからでした。最初にも触れましたように、彼らは星を観察することが仕事でした。そして、星を遣して知らされたことを確かめてみたい、そのような思いから、ユダヤへの旅を始めました。さらに、ベツレヘムで、イエス様の許を訪れることができたのは、星に導かれてでした。彼らにとって大切な意味を持っている星が、大きな役割を持つことになったのです。星に導かれて、イエス様の許を訪れることになったのです。そして、星は勝手に動いたものではありませんでした。この星を動かされた方がおられるのです。それは神様です。神様は、この星を用いて学者たちをイエス様の許まで導いたのです。つまり、ここには、神様が学者たちをイエス様の許に導かれたその働きが示されています。それも、大変強い招きです。どうしても出会わせようと強く思っておられる、神様の意思がこの星に託されているのです。そうして、学者たちはイエス様と会うことになりました。

なぜ、学者たちだったのでしょか。彼らは最初にイエス様の許を訪問するに相応しい人たちだったのでしょか。「学者」と言われていますので、なにか特別な人たちという印象を持たれるかもしれません。しかし、彼らは、聖書の民であるユダヤの民ではありませんでした。「東の方」、恐らくはペルシャの人たちでした。当時のユダヤの人たちの思いからすれば、自分たちは神様に招かれるが、学者たちのような他の国の人たちは神様に招かれることは決してないと思っていました。彼らは、本当の神様を知らない、その意味で、神様から遠く離れた人たちとされていました。神様と関わりなく一生終わって何の不思議もない。それが、この学者たちでした。彼らは、真の神様を十分に知っているわけではない。むしろ、その国の神々を大切に歩いて歩んでいるような人たちです。その人たちが、まずは招かれ、イエス様と会うことになっ

たのです。これは、偶然ではないのです。このことに、神様は大切なメッセージを込めておられます。

星の知らせたことを確認してみたい、彼らの願いや期待は当然ありました。しかし、それを遥かに超えて、救い主の誕生の喜びに出会うことになったのです。そこに、彼らの思いを超える、神様の願いが示されています。つまりどうしてもイエス様に出会わせたいという願いです。その神様の強い思いが、まず学者を招くことに託されて、示されています。全く相応しくない者が、神様の強い働き、激しいまでの導きによって、クリスマスを祝うところへと招かれたのです。学者たちがイエス様に出会っていることに、神様の強い招きがあるのです。

私たちは今日、クリスマスを祝うところへと招かれています。しかし、本当にそれに相応しいだろうかと考えてみるとどうでしょうか。私たちは、クリスマスを祝う準備ができていだろうか。クリスマスを祝う心になっているかと私たちの心を覗き込むと、いやそうはなっていないことを思われます。日々の様々な課題の中で、思い悩みで一杯になっている心です。そのような心しかないことを思います。そういう意味では、クリスマスに相応しいものとはとても思えないのです。また、このクリスマスに機会として久しぶりにこの礼拝に出席された方もおられると思います。なかなか礼拝の生活を大切にできなかった、その意味で自分はクリスマスをお祝いするのに相応しくないのではないかと思われているかもしれません。また、このクリスマスに機会に初めて礼拝に出席された方もおられるかもしれません。自分のような者が、本当にこの場にいてよいのだろうか、そういう思いがしておられる方もおられるかもしれません。しかし、この学者たちの姿を通して、私たちにはっきりと示されているのは、私たちが本当の意味でクリスマスを祝うことができるのは、私たちがどういう状態であるかから始まっているではありません。まず、神様が「あなたを招く」と決意されていることによってです。その神様の御意志による導きの中でクリスマスをお祝っているのです。そのことが、この学者たちがまず招かれていることに、はっきりと示されているのです。

学者たちが星に導かれたように、今も神様が私たち一人一人をクリスマスの喜び、へと招いておられることを思われます。今年のクリスマス、改めて神様が一人の人を本当の喜びに出会わせるため、どんなに力を尽くされているのか、受け止めさせられる機会がありました。既に皆さんにお知らせしている通り、12月8日にAさんが病床上で洗礼を受けました。このことは、ご本人が書かれた手紙から始まりました。そこには、病気で大変厳しい状況にあること、この時、教会に支えられたいことが書かれていました。その手紙を受け取った日に、私は初めてAさんのお宅を訪問させていただ

きました。それまでも何度か教会の礼拝に出席されておられましたが、そのような手紙を書かれた思いをお聞きしました。厳しい状況の中を歩まなければならない、それでご息が何か支えになる本をと持ってくると言われた時に、直ぐに「聖書」と森澤さんは言われたそうです。どうしてそう思ったのか、Aさんはお話してくださいました。若い時期にある一般の活動の中で出会った2人のクリスチャンの姿があったとのことでした。そして、そういう姿があって、いつか教会に行ってみたいと思っていたのだそうです。それぞれ別の活動だったのですが、それぞれの場にクリスチャンがいて出会うことになった。そのことを通して、人生の最も厳しい時にイエス様に出会って歩む、そのような機会が与えられたということだと思います。森澤さんにとって、そのお二人との出会いは、学者たちをイエス様の所へ導く星のようなものであったと思います。

・人となられた救い主

そして、クリスマスに招かれた者が、クリスマスを祝うとはどういうことでしょうか。そのことが学者たちの姿に示されています。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。(11節)」彼らは、「ひれ伏して幼子を拝む」のです。クリスマスとは「主イエス・キリストを礼拝する」ことなのです。この学者たちがしたことこそが、クリスマスなのです。実は、「クリスマス」という言葉もそういう意味なのです。「クリス」は、「キリスト」という意味です。そして、「マス」これは「ミサ」という意味で、私たちが普段使っている言葉で言えば「礼拝」ということなのです。礼拝とは結局その方の前に立つということですから、イエス様の前に立たせていただくということなのです。今日、私たちがこのように礼拝している通りです。学者たちは、イエス様の前に立ちました。それがクリスマスなのです。そして、そこに、本当の意味でのクリスマスの喜びがあるのです。

学者たちは、招かれてイエス様の許へやってきました。そして、イエス様の前に立ちます。それは、驚くべき光景だったのです。救い主の誕生。しかし、救い主が生まれるということで当然あるであろうと思われる神々しい雰囲気は一切なかったのです。そこは、ペツレヘムの宿屋の家畜小屋でした。その幼子は、飼い葉桶に寝かされている。そして、救い主の両親は、王宮に住んでいるこの世の権力者ではなく、日々の生活にも事欠くような、どこにでもいるような貧しい普通の人たち。そこに、救い主はお生まれになったのです。ここにこそ、神様の深い御心が込められているのです。

聖書の中にこういう言葉があります。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分にな

り、人間と同じ者になられました。(フィリピ 2:6~7)」、救い主は私たちと同じ人間となるために、クリスマスの時にお生まれになりました。しかも最も貧しい姿になられたのです。そこには、神様の明確な目的がありました。それは、私たちを救いへと導くためだったのです。

あと1週間で、今年歩みを終えようとしています。新しい年に向かっていきますが、年が変わるだけでは、私たちが担っている状況に変化はないのです。私たちの心には、重くのしかかっているものが少なくありません。感染症や戦争など、世界全体に重くのしかかっているものがあります。しかし、それだけではありません。私たち一人一人の歩みを思っても、様々な課題や困難を担い続けなければなりません。本当にこの先どうなっていくのだろうか、誰にも言うことができない重荷を担っておられる方もおられるかもしれません。将来に対する大きな不安が、私たちの心にあるように思います。私たちの実感としては、本当に道なき砂漠のような場所を、それこそ喘ぐようにして独りぼっちで歩んでいる、それが私たちの実感かもしれません。しかし、他でもないそのような重荷を担っている私たちを支えるためにこそ、イエス様は人となられたのです。

イエス様は私たちを新しく生かそうと決意されて、神様のところ、天まで来なさいと言われるのではなく、私たちのところ、人間の世界まで来てくださって、私たちの手を取って、引き上げてくださるのです。私たちの手をとるためには、私たちが歩んでいる場所まで来てくださることがどうしても必要だったのです。イエス様は私たちを高みからご覧になって、ちゃんと歩んでいるだろうかと査定するような目で見ておられるわけではありません。人生の荒波に飲み込まれて、息も絶え絶えになっている。今にも沈みそうになっている。そういう私たちを救うために、私たちの生きる世界という荒海の中に、天から飛び込んでくださったのです。そして、命を捨てる思いで、私たちの手を取り、私たちを救いの岸へと引っ張って行ってくださったのです。いや、実際に命を捨てられたのです。誕生から30年後、イエス様が十字架におかかりくださって、私たちが救いを受けて歩む障害となるものを全て取り除いてくださったのです。イエス様が命を捨てられたことによって、私たちが救いの岸へと到達することができたのです。

• 神様の恵みに生きる

私たちがイエス様と会うことで導かれる救いの岸とは、「神様の子どもとして生きる」という道です。イエス様によって、私たちは、取るに足りないこの私が神様の子どもであることを受け止めさせられているのです。神様の子ども、神様は言ってみれ

ば保護者として、私たちの歩みの全責任を持って導き支えてくださるのです。どんな時にも、どんな状況でも、変わらずにです。12月18日に神の御許に召され、先週葬儀を行いました町田啓子さんの愛された聖書の言葉は、こういう言葉です。「あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。(イザヤ 46:3~4)」神様は「あなたを背負って行こう」、それも「白髪になるまで」、つまり、生涯変わらずにです。「あなたを白髪になるまで、背負って行こう。」と。この言葉は、町田啓子さんを生涯支えたのですが、勿論、全ての者に対するメッセージなのです。この言葉を通して、神様は、私たちに向かって、今語りかけてくださっています。「あなたを背負って行こう」と。この約束の中に私たちは置かれ歩んでいます。その恵みが、このクリスマスの時に、私たちに示されたのです。

今年も共にクリスマスを祝います。それは、私たち一人一人に対する深い愛を、神様がはっきりと表してくださったからです。改めて、ここに集いました私たち一人一人は、この喜びへと神様の力強い導きによって招かれて来ました。神様がどんな時にも変わらず支えてくださることを受け止めて、感謝を持って歩み出していきたいと思えます。神様に愛されて生きる恵み、この恵みに出会うことこそが、本当の意味でのクリスマスの喜びだからです。